

2017 日本青年メディア関係者訪中団

訪問日程 平成 29 年 12 月 3 日（日）～12 月 9 日（土）

1 プログラム概要

日中青少年交流事業の一環として、中国国務院新聞弁公室の招へいにより日本の新聞社、放送会社、雑誌出版社の記者及び編集者の青年等39名（団長：共同通信社 編集局生活報道部 編集委員 内田泰）が平成29年12月3日から12月9日までの6泊7日の日程で訪中しました。一行は、テーマ「医療」「教育」に基づき、2コースに分かれ、北京市、上海市のほか、それぞれ江蘇省、浙江省を訪問し、各地でメディア関係者との交流や各テーマに沿った活動を行いました。

2. 日程

12月3日（日）

北京首都国際空港に到着、故宮博物院視察、歓迎夕食会

12月4日（月）

第1グループ：中国国家衛生・計画生育委員会体制改革司訪問・交流、中日友好医院訪問・交流、北京同仁堂訪問・交流

第2グループ：中国教育部基礎教育司訪問・交流、前門大柵欄文化街見学、中国教育科学研究院訪問・交流、北京育翔小学訪問・交流

12月5日（火）

共通：中国国際放送局訪問・交流

第1グループ：江蘇省南京市へ移動

第2グループ：浙江省杭州市へ移動

12月6日（水）

第1グループ：南京鼓楼医院訪問・交流、江蘇省ラジオテレビ総局訪問・交流、中山陵見学、南京市・江蘇省夕食会

第2グループ：浙江ラジオテレビ集団訪問・交流、浙江機電職業技術学院訪問・交流、杭州市都市計画展覧館・銭江新城シティバルコニー視察

12月7日（木）

第1グループ：南京中医薬大学訪問・交流、江蘇省鎮江市へ移動、鎮江市第一人民医院訪問・交流、鎮江市夕食会

第2グループ：杭州市楊綾子学校訪問・交流、杭州市建蘭中学訪問・交流、朝暉中学訪問・交流、西湖視察

12月8日（金）

第1グループ：潤州区黎明社区卫生サービスセンター訪問・交流、北固山視察、上海

市へ移動

第2グループ：杭州青少年活動センター視察、杭州運河クルーズ、橋西歴史文化街見学、上海市へ移動

共通：歓送報告会

12月9日（土）

上海虹橋国際空港から出国、羽田国際空港到着

3. 記録写真

【共通】



12月3日 故宮博物院視察（北京市）



12月3日 歓迎夕食会 陳遥 國務院新聞弁公室国際連絡局副局長による挨拶（北京市）



12月5日 中国国際放送局訪問・交流（北京市）



12月8日 歓送報告会 団員による成果報告（上海市）

【第1グループ：医療】



12月4日 中国国家衛生・計画生育委員会
体制改革司訪問・交流（北京市）



12月4日 中日友好医院訪問・交流（北京市）



12月4日 北京同仁堂訪問・交流（北京市）



12月6日 南京鼓楼医院訪問・交流（南京市）



12月6日 江蘇省ラジオテレビ総局訪問・交
流（南京市）



12月6日 中山陵視察（南京市）



12月7日 南京中医薬大学訪問・交流（南京市）



12月7日 鎮江市第一人民医院訪問・交流（鎮江市）

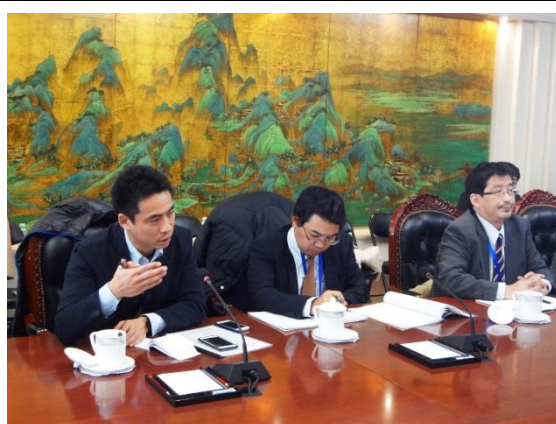


12月8日 潤州区黎明社区卫生サービスセンター訪問・交流（鎮江市）



12月8日 北固山視察（鎮江市）

【第2グループ：教育】



12月4日 中国教育部基礎教育司訪問・交流（北京市）



12月4日 中国教育科学研究院訪問・交流（北京市）



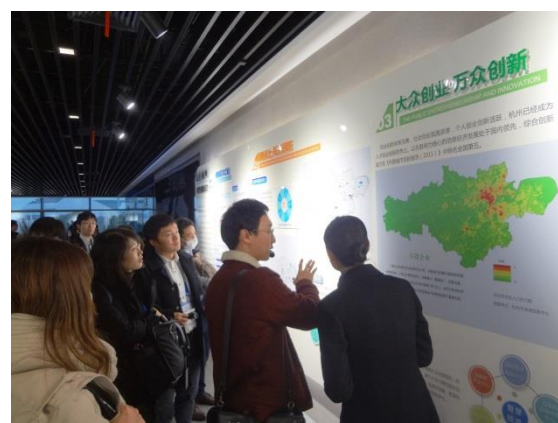
12月4日 北京育翔小学訪問・交流（北京市）



12月6日 浙江ラジオテレビ集団訪問・交流（杭州市）



12月6日 浙江機電職業技術学院訪問・交流（杭州市）



12月6日 杭州市都市計画展覧館視察（杭州市）



12月6日 銭江新城シティバルコニー視察（杭州市）



12月7日 杭州市楊綾子学校訪問・交流（杭州市）



12 月 7 日 杭州市建蘭中学訪問・交流（杭州市）



12 月 7 日 朝暉中学訪問・交流（杭州市）



12 月 7 日 西湖視察（杭州市）



12 月 8 日 杭州青少年活動センター視察（杭州市）



12 月 8 日 杭州運河視察（杭州市）



12 月 8 日 橋西歷史文化街視察（杭州市）

4. 参加者の感想

【医療】

○13 億人にもおよぶ人口を抱える中国で日本とは異なるものの“公的保険”制度なるものが存在すること自体にまず驚かされた。

また、南京で訪れた病院では1日1万5千人もの患者をさばくための自動化されたシステム、また中医薬大学では多くの学生に教えるための遠隔中継システムなど、とにかく巨大な人口のボリュームに対応するためのシステムが整えられていた。鎮江の地域衛生サービスセンターは、日本であれば診療所といった類になるかと思うが、設備はCTなども整えられ、とても診療所とは言えず一般的な病院といっても過言ではない。

そして、中国でも日本同様に“高齢化”の問題に直面していて、一人っ子政策が拍車をかける。こうした部分では日本とも協力できる部分があるのではないだろうか。

報道機関にも訪問させてもらった。中国国際放送では実に65言語によるラジオ放送を行っている。相手の母国語で中国の文化を発信できる力には圧倒された。日本として海外に自国の文化などをどのように発信していくか、現在外務省などが担ってはいるが、それだけでは足りない状況で、我々マスメディアが協力して進めていく必要が迫られていると強く感じた。

一方で、インターネットでの動画放送についてはまだ発展途上のようにもみえる。この点においては、例えば弊社がサイバーエージェント社と進めている「Abema TV」などと連携することができると思う。そうすることで中国での日本の文化発信もできる可能性も秘めている。

○正直なところ、日本人はどちらかというと中国人を下に見る傾向がある人が多い。私も中国に行くまでは中国がどのような国か、あまり想像が湧かなかった。しかし今回中国を訪問してみて、成長への勢いや病院のスマホ決済など、中には日本より進んでいる点も十分あると実感した。中国がすべてにおいて日本より優れているとは言わないが、学ぶべき点や日本がもっと便利になっても良い点は多々ある。

日本では「海外の人は日本のこういう美点に感動している」といった番組が散見されるが、こうした姿勢は日本人にとっては心地よいものだが、「日本は世界が憧れる最も素晴らしい国だ」という過大評価につながる。こうした過信は日本の進歩を妨げる一因となり、気づいたら世界に取り残されて、一部の日本好きだけを見て内向きに喜ぶことにしかつながらない。

日本を見る際には、「日本は手放しで良い国なのか？」という（英語のクリティカルという意味での）批判的な精神を持ちながら、情報を発信していきたい。海外を見る際には、今回の訪中体験のように「日本とは違う新しい世界が広がっている」ということを伝えていきたい。

一方で今回訪問したのは中国の中でも進んでいる部分かと思う。日本にも数多くの課

題があるように、中国も内包する問題がどうなっていくのか、見極めていきたい。

○医療分団に参加させていただきました。中国政府が 2009 年から取り組む医療改革の狙いは国民全てに医療サービスを提供する「医療の平等」でした。それを実行するため、北京から南京、鎮江へと病院等を見学させていただきました。保険制度を導入した上で、ネットによる診療予約、医療機関の連携による適切な診療、薬の受け取りの迅速化など、「平等」「安心」を実現するための取り組みに感銘を受けました。国際的な連携によって目指す高度な先進医療と、伝統的な医療技術のさらなる発展、中医師の育成制度の緩和も、そのためでしょう。医療改革が「面」となって広がりつつあることを実感しました。

ただし、中国を川の流に例えると、私たちが拝見したのは、川の源流部分だと思います。中国のみなさんをもっと知るためには、中流域や河口域を見る必要があります。これから、中国という大きな川がどのように流れていくのか、日本から今まで以上に心を持ち見守り続けたいと思います。さらに、中国のみなさんと日本人が今まで以上に交流し、中日関係、アジア地域などの未来に貢献できるよう、国際交流のみならず、草の根の民際交流が盛んになるよう、日本の新聞社の一員として何ができるか考えて参りたいと思います。

医療分野に限っても、中国と日本は、少子高齢化にどう対応していくかという共通の課題を抱えており、今後も手を携えていくことは十分可能であると感じました。

中国でさらに印象的だったのは、青空でした。大気汚染問題を心配していましたので、中国滞在中、澄み渡った大きな空に安堵しました。帰国後、仲間に真っ先に伝えたのは、この事です。そして、歴史と歴史遺産の数々。いつか再訪して、じっくり見たいと思います。熊本県荒尾市出身の革命家・宮崎滔天（とうてん）が物心両面で支援した孫文先生ゆかりの地を訪ねられたのも幸いです。滔天を含めて、熊本の多くの人が 19 世紀末を中心に中国大陆に渡って現地の人たちを支援する活動をしました。むろん、日中戦争にも携わっています。この歴史的事実を決して忘れることなく、中国と日本の明るい未来に少しでも力になればと考えております。温かく迎え入れてくださり心より感謝申し上げます。

【教育】

○教育部や教育科学研究院の担当者との会談では、中国政府の教育改革にける熱意がひしひしと伝わってきた。都市部と農村部との格差是正、教師の質向上、教師主導の授業から生徒主体の学習への転換などを通して、大国の未来を切り拓く人材を育てていこうという“本気度”が感じられた。

教師の創意工夫に基づく教材研究や子ども目線に立った授業づくりなど、教育の質という面ではまだ日本に一日の長があるだろうが、中国の GDP に占める教育費割合は日本

を上回っている。日本でも今まさに学習指導要領の改定や大学入試改革を進めているが、うかうかしていると、後発国の中国に追いつかれ、抜かれるのではと危機感を覚えた。指導者のトップダウンで物事を進めていく国のスピード感、ダイナミズムも感じた。

職業系の学校や青少年育成センターの視察では、ものづくり教育の質の高さに度肝を抜かれた。ロボット制作やプログラミング、3Dプリンターなど、どの分野でも設備に恵まれ、素晴らしい教育環境だと感じた。「コピー商品」だけでなく、オリジナリティあふれる商品、製品を生み出す土壌づくりが進んでいる印象を受けた。

各施設への訪問、視察といった公式行事はもちろん有意義な経験だったが、それ以上に、昼食時、また夕食時の中国人スタッフとの交流が何より思い出深い。正直、訪問前は中国という国、また中国人にネガティブな印象が先行していた。しかし、酒を酌み交わし、コミュニケーションを深めると、当然といえば当然だが、日本の同世代の若者と何ら変わらず、仕事への真摯な向き合い方や人間としての優しさに心打たれた。異国の地に「友人」ができるとは、訪中前は考えてもみなかった。日々、記事で「異文化理解」「国際交流」といった言葉を何気なく使っているが、今回、そうした言葉の意味、意義を肌感覚で学べたような気がする。

私は地方紙の記者として、教育問題や学校的话题を中心に取材、執筆している。中国の教育の実情や課題、方向性などを紙面で紹介することで、日本の教育関係者にわずかばかりでも参考になればと思うし、福井県民の中国に対する理解が進む契機になればと考えている。今回は貴重な機会を与えていただき、また行程中は丁寧なサポートをいただき、関係者の皆さまには感謝申し上げます。

○中国の近年のめまぐるしい発展はメディア等を通じて理解していたが、今回の自身としても初めての訪中で、私の想像している以上の中国の先進的な社会に驚いた。スマートフォンでほとんどのものが決済できる社会や、レンタサイクルの整備、電柱がない町並みなど日本でもなかなか進められていない社会が中国にはあった。

教育分野の訪中団で訪れた小学校では、日本の生徒にはなかなか見られない自己表現力の高さを目の当たりにし、今後の中国の先進製造業を支える人材の育成機関では中国の産業の発展の基礎となる部分を見ることができた。教育の充実は今後の自国の発展、維持に必要不可欠な要素である。これからより世間がグローバル化し、人材の多様化が予想される中で国民への基礎教育が重要なものと思われる。その中で、義務教育による基礎的要素の向上と、青少年センターなどの個性を向上させる施設が充実していることや、今後もその発展に力を入れていく政策を行っていることを実感できたのは良い経験となった。

そして最後に、日中間でマイナスなイメージの報道が注目されてしまう中、CRIのような自国、他国の良さを母国語で発信する機関の存在を知ることができたのは非常に大きい経験になった。私のような中国への渡航経験がない人間はどうしてもメディアの報

道や周りの意見に流されてしまいがちである。もちろん、事実追求などの中で衝突が起きてしまうこともあるが、両国の良さの中から相互理解を深めていくことも私たちメディアが担わなければならない点である。新潟の放送局ということもあり、新潟に目を向けると、新潟空港からの数少ない国際便の中に中国はあるのだが、昔よりも海外に気軽に行けるようになった中で、海外に興味のある方々はマイナスなイメージの情報よりもプラスのイメージの情報を求めているはずである。そのような地元の需要に答えられるメディアでありたいと思う。

今回の訪中は多くのことを学べ、今後の糧にもなる充実したものだった。このような機会を与えてくださった関係者の方々に感謝の意を表する。

○今回、初めての訪中でした。故宮では敷地の広さと建物の美しさに圧倒されました。学校見学では自国の伝統文化を守りつつ、新たな技術などを取り入れた子供たちの個性を伸ばす教育の多様性とあり方を実際に目にすることで、日本との共通点や、見習うべき点などを感じることができました。育翔小学校では児童たちと実際に交流する機会を設けていただき、演武や伝統楽器、書道、絵、合唱や踊りなどの取り組みを見させていただきました。杭州の青少年センター見学と併せて、学術面だけでなく課外活動や生涯学習的な活動に、学校や家庭など周囲の大人たちが全面的なバックアップで力を入れていることが伝わり、子どもたちの将来の選択の幅を大きく広げることに繋がっているのだらうと感心しました。

私立と公立の中学校の教育は日本とは大きく異なる部分も多く、衝撃を受けました。

メディア訪問ではCRIでの「全世界に情報を発信し、懸け橋になろうと発展した」「相手の言葉を使い、懸け橋にならなければならない」という言葉が印象的でした。事実を報道するというメディアの在り方はもちろんですが他国へ向けた自国の情報発信、また、国内でも報道する側と情報を受け取る側の懸け橋となることが我々にとって大切なことのひとつだろうと感じました。

訪問中に感じたことは、訪問先の人はもちろん、街で出会う人たちの多くが笑顔で接してくれるということでした。英語があまり話せず、中国語が理解できない私に対しても何かを伝えようとしてくれたり、また、外出先などでは身振り手振りでわからないことを教えてくれようとするなど、優しい人が多い印象を受けました。

交流を通じ、互いに学び、発信し、理解しあおうと思えることが、今後の友好の一步になるのではないかと思います。微力ですが、私も「懸け橋」になれるようこれからさまざまなことを学んでいきたいです。

今回、このような貴重な機会をくださった日本、中国の関係者の皆様に感謝いたします。

本当にありがとうございました。

○初めて中国を訪問した。建物の大きさに象徴される物事のスケール感、その実行・完成にいたるまでのスピード感が日本とは比べ物にならないと思った。

人口減が避けられない日本では将来的に「右肩下がり」の衰退傾向にあるが、中国はIT化も今後一層進む「右肩上がり」の社会構造。漠然と感じる勢いの差は明らかで、何ともいえぬ無力ささえ感じた。

今回の訪問では教育班として主に学校現場を訪問した。その際に、1 英語、2 プログラミング、3 ものづくり の分野に早い時期から取り組んでいる印象を受けた。日本でも小学校では 2020 年度、中学校では 2021 年度から導入される「新学習指導要領」に英語とプログラミングの充実化が盛り込まれている。それがどの程度のレベルのものなのか、教育を担当する記者としてチェックしていかなければならないと感じた。

北京の小学校で触れ合った五年生の女兒は、私よりも英語力が確実に高く、面食らった。おそらく学校教育だけでなく個人で塾に通うなどの努力を重ねている結果もあろうが、この年齢でこれほど英語力が高いのかと驚いた。同じく触れ合った別の6年生の男児も、相当に高い英語力だった。かねて、世界に打って出る人材育成のために中国が英語に力を入れているというのを知っていたが、改めてその実力を知ることができた。

2 のプログラミングは、杭州建蘭中で全国大会に備えて活動している生徒の姿を見ることができた。プログラミングに詳しい訪中団員によると、さほど高度なプログラミングではないが、中学生が学校で教わる内容からは逸脱しているということだった。最後の視察となった杭州青少年活動センターでも多くのカリキュラムがあり、3 のものづくりなど、子どもの創意工夫の意欲を芽生えさせ、育むシステムになっていた。休日や長期休みに通う公営の塾という位置づけだが、日本にはない国の校外教育の手厚さを知ることができた。

ニュース報道の性質上、日本での海外報道は、国の政策や特異な事件、社会問題、日本との関係に関する事がほとんどだ。裏を返せば、「普通」の出来事や日常はなかなか報道されにくい。中国も例にもれず、日本人の感覚からすれば「これは！」というべき内容だからこそ報道する価値があるわけだ。

こうした報道を見聞きする時に注意しないといけないのは、全体の少数派の出来事かもしれないのにも関わらず、それがすべてかのように受け取れることがあることだ。特に日本では中国に関する報道は総じて「ネガティブ」な論調であることが多く、それをそのまま鵜呑みにすることがいかに危険なことか、メディアに関わる一員として自戒させられた。私が中国に来て抱いた印象は「思っていたほど悪くない、ひどくない。表面的には豪華で見えない部分、細かい部分はあまり気にしない面は気になったが、日本よりもすごいと思える部分が多く、懐が深い国だ」と心から感じた。想定していた以上に貴重な体験になり、これを機に中国という国の見方が明確に変わった。語学も含め、もっと中国への理解を深め、再び足を向けたい。

またとない機会を与えていただいた中国の皆様や日中友好会館の皆様、快く送り出し

てくれた職場関係者、縁あって親しくなった訪中団員の同業他社の皆さんに、感謝を申し上げます。

○今回、北京訪問は2度目、そのほかの都市への訪問は初めてだったが、中国に抱いていた印象が完全に覆された。街の中が整然としていて、人々のマナーもよく、なおかつ環境にやさしいEV仕様のバスが走り、レンタサイクルがあちこちで利用されている状況に驚いた。指導部からの指示が届きやすい政治的な構造はあると思うが、思った以上に人々の意識も変わってきているのではないかと感じた。「教育」をテーマにした内容だったが、訪問先の学校では、「歴史教育」についてなど、センシティブな内容の質問についても、答えにくそうではあったが、紋切り型ではない答えが返ってきたのも驚きだった。

今回、テレビ局やメディアの若い世代と会話をする機会が何度かあったが、年配の世代とはまた違った意識を持っているように感じた。日本に対する見方も「ものづくりの国」「経済発展の国」というような昔ながらのイメージよりも、「アニメ」「マンガ」などのポップカルチャーの国というイメージの方が強いのではないかと感じた。彼らも「歴史教育」は受けており、日本に対する微妙な感情がないわけではないが、年配の人たちよりもそうした意識は少し薄いのではないか。日本にいとあまりそのあたりのことがよくわからず、どうしてもメディアやネットなどでの情報に頼ってしまう。そういう意味では、今回のようなお互いのことをよく知ることができる機会は本当に貴重な経験だった。

これまで統計上では、中国経済が日本を追い越したということはわかっていたが、それでも質的な面では本当にそうなのか、なんとなく信用できないと感じていた。しかし、実際に自分の目で見てみると、経済発展はめざましく、日本は井の中の蛙になっているのではないかと、自分が狭いものの見方にしばられていたのではないかと反省させられた。地方の格差の実態がどういうものなのか、今度は見てみたいと思った。